

ふ不熟辭とが結合したのである。

漢字音の中には接尾辭として用ゐられるものがある。「濱名湖」「秋葉山」「ヴォルト計」「セセッション式」などの「湖」「山」「計」「式」などはそうだ。

完辭を不熟辭化して用ゐる習慣の有るものもある。「夕刊」「市立」「製パン業」「賣買」など「夕」「市」「パン」「買」などはそうだ。

第四章 活用

第一節 總説

活用は形式的意義の變化を伴ふ。

原辭の中には語形の變化するものがある。例へば「行く」は「行か」「行き」「行け」と變化し、「白」は「しら」となり「國」は「國家」などに於いては「こつ」となる。さういふ語形の變化の中「行く」が「行か」「行き」「行け」となる様な變化は形式的意義の變化を伴ふ。「行く」は意義が終止する位で運用が安定してゐるが「行か」は「行かない」「行かう」などに於ける様に意義が不安定である。「行け」は命令を表す位で意義が放任的である。さういふ様に語形の變化に形

式的意義の變化を伴ふものを活用といふ。然るに「白」が「しら」となり「國」が「こく」となる様な變化は、單に語形が變化するだけで意義に變りはない。こういう變化を音の轉變といふ。所謂る音便、略音、約音、通音、通韻の類は皆音の轉變である。

活用は完辭にも助辭にもあるが、本章では専ら完辭の活用を論じ、助辭の活用は第五章(第二型 頁)に譲ることにする。

完辭の中活用の有るものは動詞的完辭に限る。(假にそうして置く。)然らば動詞的完辭は全部活用が有るかといふとそうではない。「勉強」「出發」「綺麗」「立派」などは動詞的完辭であるが活用は無い。

活用の模範的なものはみな下部の變化であつて上部は變化しない。「行く」は「行か」「行き」「行け」と變化するが上部の「行」は變化せず、下部の「く」「か」「き」「け」だけが變化する。嚴密に言へば「く」「か」「き」「け」が變化するのではなく、*yuku* は變化せず *yuki, yake* だけが變化するのである。この變化する部分の「行」(嚴密には *yuku*) は實質的意義を表すものであつて之を語幹と云ひ、變化する部分の「く」「か」「き」「け」(嚴密には *yuki, yake*) は形式的意義を表すものであつて之を語尾といふ。

語幹語尾の區別の不明確なもの

活用の模範的なものは右の如く語幹と語尾とに分けられるが、中には語幹と語尾との部分的區別の不明確なものが有る。例へば「得」は變化して「える」「えれ」となり、文語では「う」「うる」「うれ」となるが「え」も文語の「う」も皆一音で語幹と語尾とを兼ねてゐるのである。こういうものも活用の精神から云つて模範的な活用と何の變りは無。

「得」の様な例外の有るために嚴密には活用は下部の變化であるとは云へなくなる。そこで私は次の如くいふ。曰く、活用は精神に於て語尾的變化である。たとへ結果に於て語尾に實際の變化が無く或は全體を變化しても、その變化の精神に於て形式的意義の變化に伴ふ下部の變化であるならばやはり活用である。

多數の動詞的原辭には活用が有る。しかし活用の仕方には種々有るから活用圖を作れば種々の型に分れるのであるが、活用圖の圖式は各活用の共通點に由つて統一することが出来る。單に語形の變化から言へば、例へば

見 見る 見れ……………三形

行 行く 行け……………四形

爲 爲る 爲れ……………五形

活用圖と活段

などの如く三形、四形、五形等種々有るが、其の表す形式的意義から言へば三四形でも五形と同様の役目をするのである。そこでその語形の變化の最も多いもの「爲る」「來る」などに由つて其の數だけの役目を定め、各の役目に在る語形を活段と名け、活段に番號を附する時は次の如くなる。

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
(爲)	ス	テ	ベキ	コト	ベ
	せ	し	す	する	すれ

各活段の職能は其れづ説明を要するが其の最も代表的な職能としては

私はそんなことは知りも爲す又知らうと思ひません。

そんなことを爲てはいけない。

そんなことは私たちの爲べきことではありません。

彼の男は何でも爲ることは爲るが粗雑かしくて困る。

注意して爲ればそんな遺損ひは無い。

の「爲す」「爲て」「爲べき」「爲ること」「爲れば」の様に『第一活段す、第二活段て、第三活段

「すてべきことば」

べき、第四活段こと、第五活段ば』と「す」「て」「べき」「こと」「ば」へ續くに在る。「すてべきことば」と暗記して置けば活段が直ぐわかる。

此の五活段は他の三形四形しかない語も之に當嵌まることは「すてべきことば」を附けて

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
(見)	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ
書	か	き	く	く	け

などの如く云つて見てもわかる。

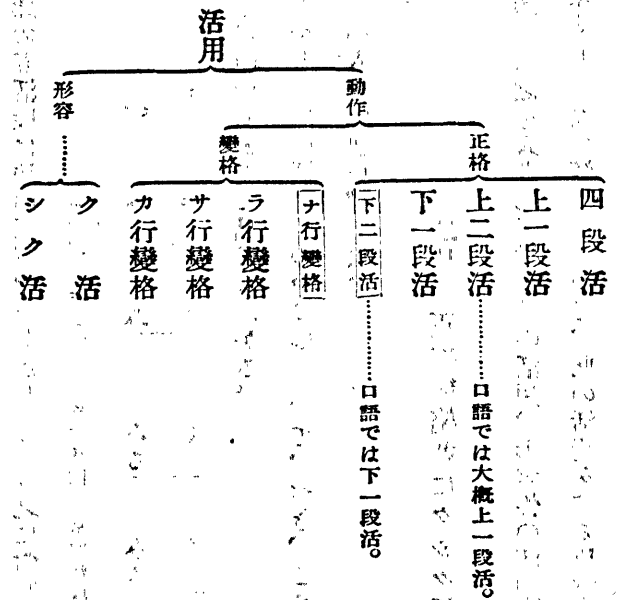
しかし多數の活用語の中には「す、て、べき、こと、ば」の一部又は全體の附かない特殊なものも全然無い譯ではない。

第二節 正格變格並にクシク活

正格變格並にクシク活
動作性の活用と形容性の活用

活用は之を大別して動作性の活用、形容性の活用の二つとする。動作性の活用は事柄を動作として表す活用であつて、此の活用をする原辭は詞として動作詞になる。形容性の活用は事柄を形容として表す活用であつて此の活用をする原辭は詞として形容詞になる。

活用の種類は古人が文語に就いて細く分けた。



此の十一種の活用の中、梓を掛けた下二段活とナ行變格は口語には無くなった。残りの九種は有る。

正格

しかし古人の説いた活用の外に猶特別な變格が有る。其れは後に説くことにして先づ右の十一種を説明する。

正格 正格は多數の語彙を有する活用である。之に對して語彙の極めて少い活用を變格といふ。正格には文語に次の五種が有る。

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
四段活	書 ^カ	か ^ス	き ^テ	く ^{ベキ}	け ^{コト}
上一段活 (着)	き	き	きる	きる	きれ
下一段活 (蹴)	け	け	ける	ける	けれ
上二段活	起 ^キ	き	き	くる	くれ
下二段活	受 ^ケ	け	け	くる	くれ

右の中「書^カ」の「書」は語幹だけを表し語尾は「^ク」が表す。こゝに「^ス」を複音活用といふ。「着^キ」は「蹴^ケ」は一音で語幹と語尾とを兼ねてゐる。之を單音活用といふ。(着)(蹴)の様に()を附けたのは單音活用の語幹である。意義だけを示すもので讀んではいけない印しに()を附けたのである。

これらの活用の語尾の音の五十音圖に於ける位置は

四段活	書	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
上一段活	(着)	か	カ	ク	ケ	こ
下一段活	(蹴)	か	キ	く	け	こ
上二段活	起	か	キ	ク	け	こ
下二段活	受	か	き	ク	ケ	こ

の如くである。

四段活の語尾は「か」「き」「く」「け」であつて五十音圖のア列イ列ウ列エ列の四段である。だから四段活といふのである。

上一段活の語尾は五十音圖の上部の一段なるイ列の音が基礎となり別に「る」と「れ」が添ふ。上部の一段であるから上一段といふが、これは上一段ルレ活用といふことを略して云ふのである。

下一段は下部の一段と「る」「れ」の活用、上二段は上部の二段と「る」「れ」の活用、下二

段は下部の二段と「る」「れ」の活用である。

右の説明はカ行に活用するものに就いてしたのであるがその他の行でも命名の理由は同様である。故に多數の活用語へ「すべきことば」を附けて見て其の五十音圖に於ける列を考へれば活用の形式がわかる。羅馬字で書いてその母音を檢しても善い。

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段

四段活	書	押	打	a	i	u	e
上一段活	着	似	見	i	i	iru	ire
下一段活	蹴			e	e	eru	ere
上二段活	起	落	懲	i	i	uru	ure
下二段活	受	失	建	e	e	uru	ure

四段活はa i u e活、上一段活はi活、下一段活はe活、上二段活はi u活、下二段活はe u活である。

四段活は卷末の活用圖に示す通り五十音圖十行の中文語ではカサタハマラの六行に活用し、口語ではナ行(死ぬ)が加つて七行に活用する。但し濁音にガ行、バ行が有る。

上一段活は文語ではカナハマヤワの六行に活用し、口語ではカサタハマヤラワの九行に活用する。濁音にはガ、ザ、ダ、バの四行が有る。

下一段活は文語ではカ行に「蹴る」が一つあるだけだが口語では十行皆活用する。

上二段活は文語ではカ、タ、ハ、マ、ヤ、ラの六行に活用するがこれは口語では全部上一段活に變つてゐる。それ故口語には上一段活の語彙が多いのである。

下二段活は文語では十行皆活用するが、これは口語では全部下一段活に變つてゐる。其れ故口語には下二段活が無く随つて下一段活の語彙が多い。

上二段活は口語に無いものと従來說いて來た。しかし無いことはない、立派にある。「奏する」「有する」「決する」「信する」の類澤山有る。文語に有つて口語に無い活用は正格では下二段活だけである。

正格といふと變格が不正な様に聞えるから善くないといふ人が有る。然らば常格と云つても善からう。しかし一月を正月といつても二月以下が不正の様に聞えもしない。必ずしも杓子定木に取らない方が善い。

四段活の語は第二活段へ「て」「や」「た」が附くと第二活段の語尾が變る。

口語の上二段活

四段活の音便

原音

音便

原音

音便

カ行 書きて 書きた

ガ行 磨きて 磨きた

タ行 立ちて 立ちた

ナ行 死にて 死にた

ハ行 云ひて 云ひた

バ行 飛びて 飛びた

マ行 住みて 住みた

ラ行 知りて 知りた

ガナバマ四行

サ行の音便

サ行は原音を用ゐて音便を使はない。音便はカ行、ガ行では「い」になり、タ行、ハ行、ラ行では促音になり、ナ行、バ行、マ行では撥音になる。そうしてガ、ナ、バ、マ四行（父音が有聲なもの）の下では下へ附いた「て」「た」が「で」「だ」になる。

サ行でも中部地方には音便を使つて「傘を翳して」「人を殺いた」などの如く「し」「い」にする處が有る。

ハ行の音便
行つて、行
つた

ハ行の音便は關西地方その他西部では「う」を用ゐて「云うて」「習うた」などいふ。カ行の音便は「い」であるが「行く」に限り「行つて」「行つた」といふ。これは「行い」となる同音を思ふのかとも思はれるが東北人が「歩いた」といふことを考へると強ちそうでもないらしい。「行く」の場合は「行つた」と云はない。これは「行いて」であるが口語に用

變格

ゐない。

變格 變格は正格(常格)に對して語彙の少い活用をいふのである。文語には

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
ナ行變格	死	な	に	ぬ	ぬる
ラ行變格	有	ら	り	る	れ
サ行變格	(爲)	せ	し	す	する
カ行變格	(來)	こ	き	く	くる

の四種が有る。

ナ行變格は文語だけの活用である。これは四段活と上二段活と雜つた活用であるが、主として四段活の性質を持つてゐる。「死ぬ」「去ぬ」の二語が有るが、「死ぬ」は口語では四段活となり「去ぬ」は用ゐないから、口語にはナ行變格は無い。但し中國邊では「死ぬる」「去ぬる」兩方ともナ行變格に使つてゐる。

サ行變格とカ行變格は口語にも有る。サ行變格は下二段と上二段との雜つた活用である。カ行變格は上二活段の第一活段だけが變つたものである。

ラ行變格は口語にも有る。

ク活シク活

ラ行變格は從來口語には無いと思はれて居たが其れは誤であつて口語にもラ行變格は立派に有る。その説明は別に第八九頁です。

ク活シク活 ク活シク活は形容性の活用であつて次の様なものである。

	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
ク活廣	く	く	く	く	く
シク活	烈し	く	く	く	く

シク活は語幹の終に「し」が有る點がク活と違ふが語尾はク活と同じであるから實は同じ活用である。だから二つを一しよにしてクシク活と云つて善いと思ふ。

クシク活は形容性の活用であつて此の活用を爲す語は詞としては形容詞になる。

クシク活は第一活段は「す」が附かない。其ればかりでなく口語では第一活段を使はない。文語では第一活段へ「ば」を附けて「長くば」「烈しくば」の如く云ふけれども口語では「善くば」「無くば」「宜しくば」「お宜しくば」だけは使ふことも有るが他の語では第一活段を使はない。しかし方言では使ふ處も有るのであるから第一活段を空欄にするよりは語尾を書いて置いて「使はない記號を附けて置くが善い。その記號としては通常」を附ける。

第二活段は音便で「う」となる場合がある。それは「長うございます」「長うございます」「長うござ」などの如く下へ「ございます」「ござんす」「ござ」を附ける場合に限る。但し西部方言では一般の場合にも音便を用ゐる。

第四活段は常に音便「い」を用ゐ、決して原音「き」を用ゐない。

不十分終止

第三活段は意味が不十分に終止する時などに用ゐる。

此の家は座敷も立派なり、庭も廣し、貸屋として申分の無い家だ。

第三活段に就いては別に次頁で論ずる。

「ずてべきことば」と「ばて點ことば」

動作性活用は一般に「ずてべきことば」へ續くのであるが形容性活用は「す」と「べき」へ續かない。「ずてべきことば」の代りに「ばて點ことば」と記入すべきである。「ば」の□は用ゐない記號、「點」は不十分終止の記號として記入するのである。

從來漏れた活用

從來漏れた活用 以上に舉げた諸活用は從來算へられたものであるが、實際は此の外にもまだ有るのである。私はその從來漏らした活用へ命名して動作性活用へ特別サ行變格、特別ラ行變格、無名の動作性活用の三つを加へ、形容性活用へ無名の一種を加へる、しかし其の説明をする前に第三活段の用法に就いて論ずる必要が有る。

第三活段論

終止と連體

第三節 第二活段の論

附、ラ行變格

「水 flowing」「花咲く」の「流る」「咲く」は意味が終止して下へ續かない。こういう用法を終止格といふ。「流るゝ水」「咲く花」の「流る」「咲く」は意味が終止せずに下の語(水、花)の意義の實體へ連り懸つてゐる。こういう用法を連體格といふ。

文語では終止格は通常第三活段を用ゐ、連體格は必ず第四活段を用ゐる。そこで從來第三活段を終止段と名づけ第四活段を連體段と名づけた。(第一活段は未然段、第二活用は連用段、第五活段は已然段と名づけられた。)

然るに口語では終止格は第四活段を用ゐるのである。第三活段の名稱を終止段とすることは文語だけに就いてならば著しい弊害は無いが、口語に於ては第三活段を終止段と名づけることは非常に不都合である。

從來の口語文典の研究は國語の本質に觸れてゐない。口語を文語文典の型に當嵌めたわけである。

文語活用圖の換骨脱體

彼等は文語の活用圖の例語をそのまゝ口語に譯したのである。そこで四段活は文語口語同

じだとし、ナ行變格ヲ行變格は口語には無いとして抹殺すると云つた遺り方である。

文語の活用圖が先入となつた彼等は無批判に第三活段即ち終止格と思つてしまつた。文語の終止格は「月有り」であるのに口語では「月が有る」といふから口語にはナ行變格が無いと思つた。文語では「人來」「花見をす」といふのに口語では「來る」「する」といひ、文語の「山高し」「風烈し」は口語では「高い」「烈しい」となるから口語のカ行變格、サ行變格、ク活シク活は文語と第三活段が違ふと思つた。

終止は第三活段に限らない。

そこで文語と口語とは活用圖が非常に違ふことになつた。しかし其れは非常な過失であつた。原因は第三活段の解釋を誤つたことに起因する。第三活段と終止格との關係は右手と利腕の様な關係である。左利きの人も有るのであるから右手即ち利腕とばかり考へてはいけない。左右は向きの區別であつて利く利かないの區別とは關係が違ふ。文語では終止格は第三活段であつても口語では終止格は第四活段である。文語と口語と乃至は古語と現代口語とでも活用そのものは大して變つては居ない。主として活段の用法が變つたのである。終止格は文語では第三活段であるのに何故に口語では第四活段を使ふか。これには理由がある。

直截終止格

今日の文語では終止格は主として第三活段を使ふ。しかし古は終止格は第三活段をも第四活段をも第五活段をも使つたのである。そうしてその終止の仕方が違ふ。第三活段の終止は意義の率直な終止である。私は之を直截終止格と名づける。單に一つの敘述を終つただけで何等餘韻の無い終止であつてぶつきらばうな言ひ方である。故に第三活段の終止は單なる記述に用ゐられる。物語などで云へば地の文にはこれが多い。第四活段の終止は一度そうだと判斷を下して置いて、更にその判斷を一つの材料として之を指示するのである。

再指終止格

私は之を再指終止格と名づける。單なる敘述ではなくて敘述の再指示である。それ故意義に餘韻が有つて言ひ方が親切である。此の終止格は多く上に「ぞ」「なむ」などの有る場合に所謂二段の結として用ゐられたが、又「ぞ」「なむ」などの無い場合にも屬用ゐられた。對話の文では第三活段の直截終止格よりもこの第四活段の再指終止格を「ぞ」「なむ」など無しに用ゐる場合の方が多かつたのである。其れは何故であるかと云へば、地の文は單なる客觀的記述であるが、對話は彼我の人情の共鳴を要求するものであるから直截終止では率直に過ぎて不親切に聞える、餘韻に富む再指終止格ならば誠にぐはひが善いからである。

口語は對話が本體である。演説などは口語の本體ではない。其れ故口語は古より主として

第四活段の終止格を用いたのである。それは物語や草子などの對話體の所を見てもわかることである。しかし口語と雖も率直に終止した場合は有つた。それが人情の發達と共に段々少くなつて今日の口語ではその痕跡を留むるに過ぎなくなつた。「其れで善し」「何でも無し」「そこを退いたり」などいふことが有るのは其の痕跡である。

第三活段の終止格即ち直截終止格に二種の用法が有る。その第一種は完全な終止格としての用法で上述の如く普通文語に用ゐるものである。第二種は終止の不十分な終止格であつて文語でも口語で使ふがこれは其の運用に制限が有る。變格ではク活シク活の類及び完了の「たり」「つ」などに用ゐられ、口語ではク活シク活の類及びラ行變格系の活用（有り、なり、たり）に用ゐられる。

文語の例を言へば

萩の露玉に貫かむと取れば消ぬ。善し、見む人は枝ながら見よ。古今集三三二

父母を見れば尊し、妻子見れば恵し愛くし。世の中は斯くぞ理り。萬葉集八〇〇

今の世の人こともなく目の前に見たり知りたり人さはに満ちてはあれど……萬葉

集八九四

不十分終止格

口語の不十分終止格

我も見つ人にも告げむ、葛飾のまゝのてこなが奥つき處。萬葉集四三二
 の「」の類で意味が十分切れずに再び下へ續く。（右の例の「見たり」「知りたり」の「たり」が第二活段でなく第三活段であることは之を「つ」に言ひかへ得る點でもわかる。）
 口語の例を挙げれば

1 道も遠し天氣も惡し一寸行かれない。

河豚は食ひたし命は惜し……

2 帯にや短し襷にや長しして使ひ道が無い。

ふみは遣りたし書く手は持たず……（持たず、ずは第三活段）

雨は烈し傘は無し全く閉口してしまつた。

の「」は皆ク活シク活の第三活段であつて不十分終止格である。此の用法は文語にも有るので

三度たぐ飯さへ剛し軟し、まゝにならぬは浮世なりけり。

などいふのは文語とも口語とも見られるものである。

さればク活シク活の活用は活用そのものに於て文語と口語乃至古語と今の口語とに於て何

も變つては居ないのである。

文語(乃至古語)	ク活	遠	く	く	し	き	けれ
口語	ク活	遠					

「文語、不十分終止及普通の終止
口語、不十分終止

である。(シク活の「烈し」を「烈しし」といふ様な用法も文語に古くから有る。) 然るに從來の口語文典は

不合理な活用圖

文語(乃至古語)	ク活	遠	く	く	し	き	けれ
口語	ク活	遠	く	く	い	い	けれ

終止格 連體格

としてしまつた。それでは不十分終止格の語尾が活用圖から漏れてしまひ、且つ第三活段の「い」の由來が分らない。終止の「い」は古くから有るので「き」の音便であつて第四活段である。此の「い」を第三活段へ置くのは口語の沿革由來を無視した愚説である。「い」を「し」の音便などといふに至つては論にならない。

ラ行變格の不十分終止格

ク活シク活の不十分終止格がわかつた上はラ行變格の不十分終止格も容易に了解される筈である。

「風采は善し華族ではあり、持てる筈だ。」

風も静なり、月も有り、散歩には此の上無しだ。

親父も親父なり、息子も息子だ。

「行つたり戻つたり、むだ足ばかりした。」

の「し」は皆第三活段で不十分終止格である。これらの「有り」が第二活段でなくて第三活段であることは右の(4)に於て「善し」と對用される心持でも分る。又(5)の「たり」が第二活段でなくて第三活段であることは文語で「行きつ戻りつむだ足のみす」と云へる心持を内省してみても分る。「つ」は「て、て、つ、つる、つれ」であつて第三活段である。

普通の説では口語にはラ行變格が無くなつて「有る」は四段活になつたとされた。それは終止段即第三活段といふ誤つた解釋から生じたことである。なるほど終止格は口語では「有る」であつて「有り」ではない。しかし其れは再指終止格である。不十分終止格は口語でも文語でも「有り」である。若し從來の説の如くにして

形容性活用のもものは第三活段が不十分終止格に用ゐられ、動作性活用のもものは「べき」が附く。獨りラ行變格だけは動作性であつて而も靜止的であるから「べき」も附くが不十分終止格にもなるのである。

ラ行變格の第三活段は「り」と「る」と二つある。「り」の方は不十分終止格に用ゐられ「る」の方は「べき」を附けるのに用ゐられる。(文語では「り」は終止格に用ゐる「る」は「べし」「まじ」などを附けるのに用ゐる。)

第四節 サ行變格の變體

サ行變格の變體

サ行變格に活用する語はもと「爲」一つであつたが此の「す」が他語と熟合して出來たものは澤山有る。その中文語の「座す」「欲す」「肯す」はもと「大座しす」「欲りす」「肯ひす」から生じたものであるが既に語源が常識的には忘れられて一單辭となつたものである。

「安んず」「疎んず」「重んず」「輕んず」などは「安みす」「疎みす」「重みす」「輕みす」……の音便であつて既に一單辭となつたものである。

「敬す」「制す」「關す」「信す」「嘆す」「投す」などの類、字音へ「す」の附いたものは非常に澤山

有る。これらは字音が語幹となり「す」が語尾となつたものでやはり一單辭となつたものである。(しかし漢字二字のものへ「す」が附いて「勉強す」「旅行す」「關係す」などの如くなるのはこれと違ふ。これは一單辭ではない。「勉強」が一詞「す」が一詞であつて「勉強す」は一連詞である。)

右の様なもの皆一單辭である以上サ行變格は語彙が非常に多い活用であつて決して變格でない。正格(常格)の一種として三段活と云つて善い譯である。しかし語源から言へば「す」一つであるから假に語彙が少いものとして從來の習慣通り變格の中へ入れて大した差支は無からう。

サ行變格の活用は口語と文語と全く變りは無。唯活段の用法が少し違ふだけである。それは第八九—九一頁を参照すればわかる。

サ行變格の語は文語では常に必ずサ行變格であるが口語では轉じて他の活用にもなるものが多い。即ちサ行變格、上二段活、上一段活、四段活の四種の活用の全部又はその若干に活用する。そうして其れはその語の種類に由つて違ふのであるが、今次へ四種の全體に用ゐられる語例を挙げる。

「爲」の活用は四種に別れる。

滅列決
達發合
愛制適

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段				
サ行變格	セン	シ	ス	スル
上二段活	シヨウイ	シ	ス	スル
上二段活	シヨウイ	シ	ス	スル
四段活	サウイ	シ	ス	スル

但し四段活にするのは蕪雜な語遣ひである。

詳しくは次の七種に分けていふべきである。

一、平易な字音で語尾が清音なもの これは四種の活用全體に用ゐられるもので右の例はこれである。

二、平易な字音で語尾が濁音なもの

禁吟變
信論感
命映應

サ行變格				
上二段活	ゼン	ジ	ザ	ズル
上二段活	ジヨウイ	ジ	ザ	ズル
上二段活	ジヨウイ	ジ	ザ	ズル
四段活	ジヨウイ	ジ	ザ	ズル

四段活にはならない。

三、硬苦しい字音(皆清音語尾)

抗奏呈
拉歟
印歟

サ行變格				
上二段活	セン	シ	ス	スル
上二段活	シヨウイ	シ	ス	スル
上二段活	シヨウイ	シ	ス	スル
四段活	シヨウイ	シ	ス	スル

上一段活にはならない。四段活にはなるがいやな語になる。
硬苦しいとは文語に用ゐるのが本體であつて口語としては熟してゐない意である。無教育な人などには不向なものである。

四、單音活用の「爲」

(爲)				
サ行變格	セン	シ	ス	スル
上二段活	シヨウイ	シ	ス	スル
上二段活	シヨウイ	シ	ス	スル
四段活	シヨウイ	シ	ス	スル

上一段活と四段活にはならない。無教育者は上一段活にして、勉強を爲るなどともいふが標準にはならない。地方によつては「勉強をせる」など、下一段にする。

五、訓の語で語尾が清音なもの これは「一」に準ずる。「欲す」はその適例である。「座す」が王朝末から四段活に用ゐられたもの之に準すべきものの先驅であらうか。

六、訓の語で語尾が濁音なもの これは「二」に準ずる。「安んず」「重んず」「肯ず」の類。

七、全く口語化した字音

辭察結				
案煎焙	上二段活	シヨウイ	シ	スル
封御覽	上二段活	シヨウイ	シ	スル
封御覽	上二段活	シヨウイ	シ	スル
封御覽	上二段活	シヨウイ	シ	スル

上一段活だけである。特に口語に馴れたものである。之を上二段活にすると確詰らしい窮屈な文語味の語になる。そうなれば「二」「三」に屬する。

「爲」から生じた語はサ行變格、上二段活、上一段活、四段活の四種の全部又は一部に活用す

「爲」の活用は上二段活
が本體であ
る。

るが、この四種の中どれが本體であるかといふと其れは上二段活又は上一段活である。四段活は新しい言ひ方で本體ではない。サ行變格は文語的又は上方的口調に於て用ゐるので本體ではない。「爲ない」「爲よう」「爲まい」「誅しない」「誅しよう」「誅しまい」といふ様に上二段活ならば第一活段へ「ない」「よう」「まい」が附く。これが東京語の固有の言ひ方である。然るに「ない」の代りに「ん」を附けると「爲ん」「誅せん」の如くサ行變格になる。これは上方的口調が東京に流入したものであつて固有の東京的口調ではない。又「しない」を「せぬ」と云ひ、「しよう」を「せう」といふのは文語又は上方語である。東京語としてはサ行變格は本體ではない。故に東京語に就いて言へば古のサ行變格は現代口語では上二段又は上一段となつてゐるのである。

上二段と上一段との間に區別が有る。上二段は「信ずる」「決する」などの如く嚴正な言ひ方である。上一段は「信じる」「決する」などの如く平易な通俗な云ひ方である。

第五節 特別ラ行變格

ラ行變格

「あり」の活用がラ行變格であることは既に論じた。此の「あり」がク活シク活の語の第二活

段へ附いたものは「遠くあり」「烈しくあり」などの様に一つの連詞であるが、その「くあ」が約つて「遠かり」「烈しかり」……の様な單辭になる。この單辭の活用は文語では「あり」と同様にラ行變格である。

文語	第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段				
	ラ行變格	遠	から	かり	かり
ラ行變格	烈し	から	かり	かり	かり
				かる	かれ

ク活シク活の語は一般に皆此の活用を爲すのであつて之をク活シク活の轉活用と云ひ、ク活シク活の方を原活用といふ。

ク活シク活の右の轉活用は口語にも有るが、口語では少し變つてゐるから之を特別ラ行變格といふ。

特別ラ行變格

口語						
特別ラ行變格	特別ラ行變格	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
烈し	遠	から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
		から	かり	かり	かり	かれ
	</					

第一活段へは「う」が附く。「道が遠からう」「風が烈しからう」の類だ。

第二活段へは「た」が附く。しかしその場合は語尾「かり」が音便で「かつ」となる。「道が遠かつた」「風が烈しかった」の類である。箱根以西の語では第二活段へは「さう」も附く。「道が遠かりさうだ」「風が烈しかりさうだ」などいふ。第二活段の「かり」がこの方言には原音のまゝで残つてゐる。

第四活段以下は東京語では使はない。唯第五活段を命令や放任に使つて

御前の爲に善かれと思へばこそあゝのこのうのと考へても見れ、何で惡しかれと思ふものか。(命令)

晩かれ早かれ世に出る時は來るのである。(放任)

などいふ場合は有るが、これは舊時代の口語の遺物であらう。

第四活段は東京語には無いが九州語には有る。

道が大變に遠か。(遠い意) 今日風が烈しか。(烈しい意)

遠か處 (遠い處の意) 風の烈しか日 (烈しい日の意)

文語「遠かる」「烈しかる」の「る」が捨てられたもので第四活段である。(口語では第四活段が終止格にも連體格にもなる。)

口語でラ行變格の第四活段の「る」の消える場合は動助辭の場合にもある。「散りたる花」が「散つた花」となり、「綺麗なる花」が「綺麗な花」となる様に「たる」なるは「た」となる。「かる」が「か」となるのは此と同じ理由である。此の「る」の消滅したラ行變格を私は特別ラ行變格と名づける。此の活用に屬するものは動助辭に「だ」「な」「た」の三つが有る。

特別ラ行變格	綺麗	だら	だり	だ	だれ
特別ラ行變格	綺麗	なら	なり	な	なれ
特別ラ行變格	行つ	たら	たり	た	たれ

「かり」だけではなく、こゝにいふ仲間が有るのであるから特別ラ行變格といふ名稱を附けることは有意義だと思ふ。

「かり」の第三活段は用例を聞かないが、ラ行變格系である以上「なり」「たり」などからの類推上その語尾の存することは勿論である。たゞ語尾が有つても用ゐないのである。使はないからと云つて消して仕舞ふのは善くない。後から方言などに残つてゐることを發見する場合は幾らも有る。語尾だけは存して用ゐない印を附けて置く方が善い。それであれば活用體系の統一を敗ることになる。

第六節 特別サ行變格

特別サ行變格

ござんす

サ行變格は口語では殆ど廢滅しようとしてゐる。「爲」が上二段活を本體とする様になつたことは前に説いたが、もとサ行變格であつたものにまう一つ「御座んす」が有る。舊い口語ではサ行變格であつたが近頃の口語では第四活段の語尾の「る」が消えてゐる。私は之を特別サ行變格と云はうと思ふ。「る」の消滅に因つてラ行變格、對、特別ラ行變格が出来、サ行變格、對、特別サ行變格が出来たのである。

サ行 變格	御座ん	せ	し	す	する	すれ	舊口語
特別サ行 變格	御座ん	せ	し	す	する	すれ	現口語

「御座んす」は純東京語である。單獨には殆ど用ゐず、多くク活シク活の第二活段の音便の下へ附けて「善うござんす」「烈しうござんす」などの様に使ふ。他地方では「ござんす」を用ゐない處もある。そういう人は「善いです」「高いです」などといふので其れが東京人にも傳播し近頃は東京人もそういう場合が多くなつた。

です
ます

無名の動作
活用

第七節 無名の動作性活用

「ごさんす」は「ございます」から轉じたものである。日常の語であつて嚴肅な語ではない。嚴肅にいふには「ございます」を用ゐるのである。「ございます」は「御座る」へ動助辭の「ます」の附いたものであるが、此の「ます」も特別サ行變格である。動助辭には特別サ行變格に活用するものに「ます」の外に「です」が有る。

特別サ行變格	〔行き〕	ま ^せ	ワ
特別サ行變格	〔綺麗〕	まし	ヲ
		で ^せ	
		まし	
		です	イ
		ます	
		です	コト
		ます	
		ですれ	
		ますれ	

こゝにいふ仲間が有るから特別サ行變格といふ名稱を附けることは無意義ではなからうと思ふ。

動作性活用の中に次の様なものがある。

第一活段 第二活段 第三活段 第四活段 第五活段

そんなら ○ ○ そんな ○

無名の活用

こんな	○	○	○
あんな	○	○	○
どんな	○	○	○

この外に次の様な語が有る。

録レクな人間は居ない。

けケんな顔をして居た。

めメつたなことは言へない。

飛トビんだ災難

太フツしたものだ

いはゆる個人主義

あらゆる學校

日本に於ける耶蘇教

の「」の類は連體格に用ゐる第四活段が有るだけで他の活段は無い。語形に變化が無いから無活用だといふ人も有らう。しかし活用は必しも語形の變化を要するものではない。文語「知らじ」「行かじ」などの「じ」は語形は變化しないが「○、○、じ、じ、○」といふ活用として認められてゐる。右の「」は語形は唯一形だけであつてもその有する語形は活用の第四活段としての語形である。活用が無くて唯一形なのとは違ふ。他の活段の無いのは偶

然のことであつて、若し他の活段も有れば有り得るものである。故に私はこゝにいふものを無名の動作性活用の中へ加へる。

「そんな」の類を形容性と思ふ人もあるが其れは誤である。これはラ行變格の崩れたものであつて靜止的動作を表すものである。形容を表すものではない。靜止的動作と形容とは違ふ。

第八節 無名の形容性活用

無名の形容性活用

形容性活用の中に次の様なのが有る。

無名の活用	第一活段	第二活段	第三活段	第四活段	第五活段
此 コ う	○	○	○	○	○
其 ソ う	○	○	○	○	○
彼 カ ら	○	○	○	○	○
何 ナニ も	○	○	○	○	○
如何 イカ に	○	○	○	○	○

○ ○ 同 じ ○
○ ○ け し か ら ん ○

これも無活用と思はれ易く「同じ」「けしからん」の外は皆副詞と思はれ易いが、それは淺薄な粗様な考へである。決して副詞ではなく詞としては形容詞たるものである。私は説明の便宜上此の問題を助辭の「に」の處(第三頁)で一しよに論じようと思ふ。「靜かに」「明に」「立派に」などが副詞でなくて形容詞であり、活用としては第二活段であることを述べる處で一しよに論ずることにする。

「こう」「そ
う」の假名
遣

「こう」「そう」の假名遣、普通には「かう」「さう」だとされてゐるが私はそう思はない。何となれば語源の體系が次の如くである。

此	此	此	此	此	此
此	此	此	此	此	此
其	其	其	其	其	其
彼	彼	彼	彼	彼	彼
何	何	何	何	何	何

此の如く縦横に織られた體系を持つてゐる。元は凡べて「こ」「そ」「あ」「を」である。「あ」

「どう」が「彼」「何」から出たやうに「こう」「そう」も「此」「其」から出たのである。

然るに古より「斯く」「然」然といふ語が有つて「斯く」は音便で「かう」となつた。「さ」は「さう」とはならなかつた。「斯く」「然」の發生は文獻以前からであるが、音便「かう」の發生は平安朝初期である。そうして發音は字の通り「かう」であつた。其れが平安朝末あたりから「こ」「と」發音される様になり同時に「其」「彼」「何」から「そう」「あ」「どう」が出来た。「かう」が「かう」と發音された時には「斯く」の音便であつたが「そう」「あう」「どう」と並んで用ゐられた「こ」「と」は「そう」「あ」「どう」に類推されて「此」から直接に導かれた。「斯う」を母胎として生れた「こ」「と」ではあるが「そう」「あ」「どう」から自己が「此」を父とするものであることを自覺したのである。然らざれば「こんな」は發生しない。「こんな」が發生したことは「こ」が自己の語源の「此」であることを自覺した確證である。

古くから有る「斯く」も「此」から由來したものである。「しか」も「さ」も皆「其」から轉じたのである。「若しく」「蓋しく」「少しき」「らしき」等ク活シク活に働かうとして中絶した語が有る。それと同様「此」のク活に働きかゝつたものが「此く」である。「此く」といふ心持で用ゐられたが發音は「かく」となつた。「其」は「其く」といふ心持で用ゐられたが發音は「しか」と

なり「さ」となつた。「此く」其くといふ語は文獻上に徴すべきものはないが心持はそういふ心持であつたのである。

假名遣は契沖の萬葉研究に由つて始めて正された。しかしそれは文語雅言のことであつて口語俗言の假名遣は今日と雖もまだ十分研究されてゐない。明治の中期あたりから口語文法の研究が興り口語の假名にも注意されて來たが、やはり強ひて文語の假名遣に當てはめたのであるから、文語に無いものゝ假名遣は研究されてゐない。「こう」「そう」「あゝ」「どう」の中文語に「斯う」「さ」が有るので「こう」「そう」の假名は「かう」「さう」だと考へたのであつて「どう」「あゝ」などのことは考へなかつたのである。そんな淺はかな研究ではだめだ。

正しい假名遣は文語の「こゝ」は「かう」、口語の「こゝ」「そゝ」は「こう」「そう」である。

「まう」の假名遣

序に云ふ、「まう一年」「まう一つ」などの「まう」は「今」の音便であるから「まう」である。「もう」ではない。「今一つ」を音便で「まう一つ」といふのである。約めて「ま一つ」などいふ地方も有るが東京語ではない。約めて「も」と云つても「まう」の假名は「まう」である。字音「毛」「保」は假名では「も」「ほ」の假名になつてゐるが、それは約めた音であつて「も」「ほ」と讀む場合の假名は「まう」「はう」である。「もう」「ほう」ではない。「まう一つ」「まうも」とそれと同様の約めた時の「も」とは別である。

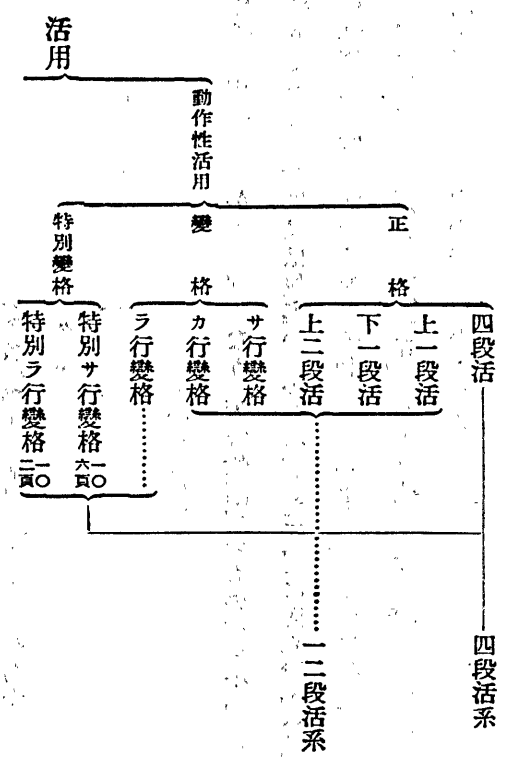
「まう卒業した」などの「まう」は「今は」の音便である。今までは學生だつたが今は卒業生だといふ様に、始め「今は」

と云つたのが音便で「まう」となつたのである。「もう」ではない。

「そうして」を「そして」といふのは方言だ。東京語では「そして」とはいはない。

第九節 活用の種類の整理

今まで説いて來た活用の種類を整理して順序を立てると次の如くなる。



〔無名の動作性活用〕……………無名系

形容性活用……………
ク活
シク活
無名の形容性活用

動作性活用のもものが動作詞になり 形容性活用のもものが形容詞になることは第廿頁に説いた通りである。特別又は無名の二字を冠した活用は従來說かなかつた活用である。

動作性活用は四段活から無名の動作性活用までの十種に分たれるが、之を大別すると四段活系、一二段活系、無名系の三種になる。此の三種は語尾の用法に於て著しい相違がある。今之を表にすると次の如くに表される。

四段活系			
特別サ変	特別ラ変	ラ変	四段活
御座ん	無	有	書
せ	から	ら	か
し	かり	り	き
す	かる	る	く
す	かる	る	く
すれ	かれ	れ	け

一二段活系			
カ変	サ変	上二段活	下二段活
變	變	決	受
(來)	決	し	け
こ	せ	し	け
き	し	し	け
く	す	す	ける
くる	する	する	ける
くれ	すれ	すれ	けれ

右の表に1 2 3 4 5の記號で示す通りの相違が有る。

1、未然を表すのに四段活系では「書かう」「有らう」「無からう」「御座んせう」の如く「う」を附け決して「よう」を附けない。「一二段活系では「起きよう」「受けよう」の如く「よう」を附けて「う」を附けない。

2、被動、使動を示すのに四段活系では「書かれる」「書かせる」の如く「れる」「せる」を附け、「一二段活系では「起きられる」「起きさせる」の如く「られる」「させる」を附ける。

3、第二活段へ「て」「た」が附くと四段活系ではサ行以外は「書いて」「有つて」「善かつて」

の如く語尾が音便になるが、一二段活系では「起きて」「受けて」の如く原音のまゝである。

4、四段活系では「まい」が「書くまい」の如く第三活段へ附くが、一二段活系では「起きまい」の如く第二活段へ附く。

5、命令を表すのに四段活では「書け」の如く第五活段を用ゐるが、一二段活系では「起きろ」「來い」の如く第一活段へ「ろ」又は「い」を附ける。

四段活系と一二段活系との別は主として第一活段に在る。四段活系の第一活段はもと皆ア列の音であつて一二段系の第一活段はア列以外の音である。唯例外として特別サ行變格の第一段活だけはア列の「さ」でなくて「せ」であるがその語源はア列であつたのである。「ござんす」は「ございます」から轉じたもの、そうして「ます」は現代の口語では特別サ行變格になつてゐるが古語では四段活「座す」であつたのである。その由來に由つて第一活段は「せ」になつても依然として用法が四段活的である。語形はサ行變格に近いが、用法は四段活的である。

第十節 活用の轉換

「本を読む」の「讀む」と「本が讀める」の「讀める」とは同じ原辭が二通りの活用をするのでその用途の如何に由つて適當な活用を使ふ。かういふことを活用の轉換といふ。轉換し得る活用は多くは元の活用と後から轉じた活用との別が有る。「讀む」と「讀める」では「讀む」が元の活用で「讀める」は可能の意を表すために轉じた活用である。名づけて原活用、轉活用といふ。

活用の轉換の中にはその規則の一般的でないものもある。例へば「暮れる」「枯れる」は「暮らす」「枯らす」と轉するが、此の型に由つて「流れる」「脱れる」を「流らす」「脱らす」といふことは出来ない。かういふ様な特殊な轉換もその規則を記述し得ないことはないが、しかし最も必要なことは一般的な規則である。だから本書はその最も一般的な轉換法則を挙げようと思ふ。私は之に下の三種を認める。

可能性の轉活用

四段活の語は同じ行の下一段活に轉すると可能の動作を表す語になる。之を可能性轉活用といふ。此の轉活用は自然の動作又は價值を表すこともある。

可能性の轉活用

原活用、四段活

轉活用、下一段活

カ行	書	かきくく	け	け	ける	ける	けれ
サ行	押	さしすす	せ	せ	せる	せる	せれ
タ行	立	たちつつ	て	て	てる	てる	てれ
ナ行	死	なにぬぬ	ね	ね	ねる	ねる	ねれ
ハ行	言	はひふふ	へ	へ	へる	へる	へれ
マ行	住	まみむむ	め	め	める	める	めれ
ラ行	取	らりる	れ	れ	れる	れる	れれ

此の子は漢字を書く。……原動

此の子は漢字が書ける。……可能

此の筆はいやな字が書ける。……自然

此の筆は中々書ける。……筆の價值

此の轉活用はどうして出来たか。それは四段活の語へ「れる」といふ助辭が附いて約つたのである。「書ける」は「書かれる」が約つたのである。「押せる」は「押れる」で、「立てる」は

「立たれる」である。

被動性使動性の轉活用

被動性使動性の轉活用

サ行變格の「爲る」は轉じて「爲れる」「爲せる」となる。

生徒が復習をする。……原動

人に大きな聲で復習をされると誰でも困る。……被動

教師が生徒に大きな聲で復習をさせる。……使動

これを被動性の轉活用、使動性の轉活用といふ。「される」はもと「せられる」の約音で、「させる」は「せさせる」の約音である。

原活用、サ行變格

轉活用 下一段活

(爲)	せ	し	す	する	すれ	され	され	される	される
(爲)	せ	し	す	する	すれ	され	され	される	される

動作性の轉活用

動作性の轉活用

ク活シク活は形容性の活用で詞としては形容詞になるものであるが之を特別ラ行變格に轉用すると動作詞になる。之を動作性轉活用といふ。

原活用、クシク活

轉活用、特別ラ行變格

遠	く	く	し	き	けれ	から	かり	かり	か	かれ
烈しく	く	く	し	き	けれ	から	かり	かり	か	かれ

第十一節 誤り易い活用

本節に説く所は實用上最も必要である。

活用の誤といふ中に次の二種が有る。

一 活用種の誤 これに二通り有る。その一は自己の方言から標準語を間違へる。今次へ若干の例を挙げる。

「貸す」は四段活であつて文語と同じである。之を中部地方には「貸せる」と下一段といふ處が有る。その方言から標準語を誤り易い。

「借りる」は上一段であつて文語と違ふ。之を西部には「借る」と四段活にいふ處が多い。東

京語では文語風にいふ場合の外は「借る」といはない。

「飽きる」は上一段活である。中部地方の人は「飽く」と四段活に誤り易い。

「足りる」は上一段活である。中部地方の人は「足る」といふ。東京の人が「足る」といふのは文語風を帯びた場合だけである。

「拵へる」は下一段活である。中部地方ではこれを「こしらふ」「こしやふ」と四段活にいふ處が有る。

「散る」は四段活である。東北地方には「花が散れる」などの如く下一段にいふ地方が有る。

「真黒」「真白」「真青」「真赤」など「真」を冠した語は總べて無活用である。助辭を附けて「真黒な」「真白な」「真黒だ」「真白だ」の如くいふべきである。それを中部地方には「真黒い」「真白い」の如くク活にいふ處がある。

「来る」はカ行變格であつて第一活段は「こ」である。東京の近在には之を上二段にして「こ」を「き」といふ地方が有る。「來ない」「來られる」などいふ。標準語は「こない」「こられる」である。

まう一つは慣れない文語を口語に用ゐる場合に一二段活を四段活に誤り易い。

【誤】	【正】	【誤】	【正】
1 帯ばない—帯びない	帯んだ—帯びた	詫ばない—詫びない	詫ばない—詫びない
詫ばう—詫びよう	生はない—生ひない	戀はない—戀ひない	戀はない—戀ひない
報はない—報いない	舊らない—舊りない	用はない—用ゐない	用はない—用ゐない
悔はない—悔いない	老はない—老いない		
2 見らない—見ない	着らない—着ない		
3 備うて—備へて	憂はない—憂へない	備はない—備へない	備はない—備へない
任さう—任せよう	載さう—載せよう		

①は上二段、②は上二段、③は下二段である。之を四活段に間違へる。

近來文語の文に慣れない人が段々多くなつたがそれらの人の口語文に往々右の様な誤が有る。蓋し一二活の動詞が少く四活の動詞が多いために活用を知らないといへども四活活にいふのである。文語に親みの無い人の陥る誤である。

第九頁の「三」に挙げた字音のサ行變格が四活活になるのもこの誤の稍是認められつゝあるものである。

二行の假名遣の誤 これは主として上二段下一段に於てであつてヤ行ハ行、ア行ワ行、ダ行ザ行を誤るのである。

上二段活	上	下二段活
ハ行 ○戀、生、強、誣、用	ハ行 ○掘	ア行 ○得、心
ヤ行 ○悔、老、報	ダ行 ○閉、恥、捻、攀	ヘ行 堪、支、教、數、傳
ヂ行 ○閉、恥、捻、攀	ザ行 ○掘	ワ行 ○植、餓、据
ヒ行 ○ひ、ひる、ひる	ジ行 ○じ、じる、じる	エ行 ○え、える、える
イ行 ○い、いる、いる	チ行 ○ち、ちる、ちる	ヘ行 ○へ、へる、へる
ウ行 ○う、うる、うる	ニ行 ○に、なる、なる	エ行 ○え、える、える
エ行 ○え、える、える	ハ行 ○は、はる、はる	ワ行 ○わ、わる、わる
オ行 ○お、おる、おる	カ行 ○か、かる、かる	カ行 ○か、かる、かる
キ行 ○き、きる、きる	サ行 ○さ、さる、さる	サ行 ○さ、さる、さる
ク行 ○く、くる、くる	タ行 ○た、たる、たる	タ行 ○た、たる、たる
ケ行 ○け、ける、ける	ナ行 ○な、なる、なる	ナ行 ○な、なる、なる
コ行 ○こ、くる、くる	ハ行 ○は、はる、はる	ハ行 ○は、はる、はる
セ行 ○せ、せる、せる	ヘ行 ○へ、へる、へる	ヘ行 ○へ、へる、へる
ソ行 ○そ、さる、さる	ワ行 ○わ、わる、わる	ワ行 ○わ、わる、わる
ゼ行 ○ぜ、ぜる、ぜる		
ゾ行 ○ぞ、ぞる、ぞる		

この中の有るものは語数が少ないから記憶し易い。○の無いものは語数は多いが、文語ではヤ行の活用は第三活段が「ゆ」でハ行の活用は第三活段が「ふ」(發音的には「う」)であつて發音が違ふから、文語の第三活段を正しく讀む習慣を附けて置けば活用の行を知ることが出來、従つて他の活段及び口語の諸活段の假名を誤ることを免れる。

第十二節 迂愚な活用圖

寫實的活用圖

活段 我々は活用を五活段に整理する。それは國語の歴史をも考へ文語をも參考して立てた活用圖である。國語の歴史や文語との交渉を無視して單に現代口語の實際に由つて活用圖を作つたならば活段は決して五つばかりではない。例へば「飛ぶ」といふ語に就いて言へば「飛び」「飛ぶ」「飛べ」の外に「飛んで」「飛んぢやあ」「飛びやあ」などが有る。寫實的に言へばこれらが各一つの活段を要求する譯であるから活用圖は

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
飛 ば び んで んぢやあ ぶ べ びやあ ばあ ……………

の如く十活段にも十五活段にもなるのである。しかし「飛んで」は「飛びて」の音便、「飛んぢやあ」は「飛びて」の音便、「飛びやあ」は「飛ぶ」の音便である。現狀を寫實的に言へば十五六活段あつても原音の五活段を以て代表せしめ得る。故に活用は五活段で済む。五活段は單なる五活段では

なくてその音便をも代表する所の五活段である。

然るに世には六段式の活用圖が行はれてゐる。これは文語のナ行變格に「死ぬ」といふ命令の形が有る爲に「死ぬ、死に、死ぬ、死ぬる、死ぬれ、死ぬ」として「死ぬ」を第六活段命令形としたのである。「死ぬ」はもと「死ぬれ」と等しいものであつて「ば」を附けるには「死ぬれ」を用ゐ、命令には「死ぬ」を用ゐるといふ區別は有るが、等しく第五活段である。喧しく言へばナ行變格は

ナ行變格
死 ぬ な に ぬ んで ぬる ぬれ
死 な に ぬ 〇 ぬ

の如く二種の活用が有るのである。「ぬ」を第六活段にすべき謂はれない。況んや他の活用をも六段に揃へるために第一活段へ「よ」や「ろ」を附けた「起きよ」「受けよ」「受けろ」の類を第六活段とするが如きは愚中の愚と云はなければならぬ。理論上からは不合理で實用上からは不便である。一段殖えて記憶し惜く、讀むのに調子が悪い。

轉活用 「飛ばう」「飛ばん」「飛んだ」なども語源に拘らずに言へば皆「飛ぶ」の轉活用である。之を轉活用として活用圖を作れば

原活用	四段活	飛	は	び	ぶ	ぶ	べ	現在、肯定
轉活用	無名活用	飛	○	○	○	ばう	○	未然
同	同	飛	ばす	はす	ばす	ばん	ばね	否定
同	特別ラ變	飛	んだら	んだり	んだり	んだ	んだれ	完了

の如くなる。

この活用圖は眞である。決して誤ではない。しかし甚だ不便である。それよりは「飛ばう」「飛ばん」「飛んだ」を完辭の「飛ば」「飛び」と動助辭の「う」「ん」「だ」に分解して活用を別々に論ずる方が合理的で且つ便利である。この分解的説明が分つた上で更に「飛ばう」「飛ばん」「飛んだ」を一語として觀察すれば善いのである。始めから一語として見れば徒らに複雑になる。

然るに一二の文法書には次の様な活用圖が立てられてゐる。

書	か	き	く	け	こ
現在形					
未來形					

所謂五段活

貸	さ	し	す	せ	そ
立	た	ち	つ	て	と
死	な	に	ぬ	ね	の

こゝに於て五段活といふのである。活用圖と五十音圖と一致することを樂む心持が動機かも知れない。この活用圖は不合理である。終止とか連體とかいふ問題と現在とか過去といふ問題とは別々の問題である。何となれば現在にも終止連體が有り、過去にも終止連體が有る。縦と横との關係であつて一直線に並ぶものではない。縦と横を混同することは不合理である。「書く」は現在の終止形であり「書かう」は未來の終止形であるから行を別にして終止形として同列に並べるべきである。もし口語の「書く」が第五段未來形であるならば文語の「書かん」も第五段未來形でなければならぬ。そうしたらば文語の「書かめ」は第六段とするか。此の主義が全くだめなことは前頁の表を見ればわかる。

第十三節 五十音圖の誤解

世人は甚しく五十音圖を誤解してゐる。世人に五十音圖を人爲的なものと思つてゐるがこ

れは決して人爲的なものではない。學者が作つたものではない。日本の國語が作つたものである。但しアカサタナハマヤラフといふ順序とアイウエオといふ順序は偶然な順序であつて五十音圖としては行の順序はどう變つても善く列の順序はどう變つても善い。唯行と列との混合が許されないだけである。

羅馬字で五十音を書く人はサ行の「シ」を *si* と書き、タ行の「ち」を *chi* と書き、ハ行の「ふ」を *fu* と書いたりして五十音圖は正しくない様に考へるが、聲學的に言へばそんな生易しいことではない。羅馬字で同じ文字を書くものも他音との連続の關係で甚しく發音が變るのであつて聲學的には五十音圖は殆ど成立すべからざるものである。

然るにも拘らず五十音圖は立派に成立する。それは五十音圖はその音價を聲學的標準以外別に求めるからである。即ち文法學的音價なるものが有るからである。

實子の無い人が養子を養つて家督を相續させる。血統上は親子でないものが人倫の上から親子と看做される。之を擬制といふ。此の擬制の上に家族制度は維持される。字餘りの句も和歌などで五字又は七字と見做される。義齒も齒として用ゐられる。

「し」の聲學的音價は「*si*」であつて「*shi*」ではない。即ちサ行のイ列でなくてシャ行のイ列

である。しかし文法學的音價は「*si*」である。サ行のイ列には實子が無いからシャ行イ列の「*shi*」を貰つて來て養子にし之をサ行イ列の「*si*」として用ゐるのであつて、養親と養子とは人倫上何處でも親子である。その意味に於て「し」はサ行イ列である。サ行イ列としての「し」は「*si*」である、「*shi*」ではない。

我が國語の音韻組織は「し」をサ行イ列として取扱ふ上に成立してゐるのである。これは人爲的に定めたのではなく國語の成立が之を定めたのである。故に

行かない——行きます

泣かない——泣きます

貸さない——貸します

押さない——押します

「行か」「對」「行き」の比は「貸さ」「對」「貸し」の比に等しいのである。「し」に「*si*」の音價を認めることに由つて國語の活用組織が成立してゐる。

「し」の論はたゞ一例示である。清濁の各行各列皆そうである。

受け：受く——立て：立つ

立て：立つ —— 出で：出す

着せ：着す —— 混せ：混す

夕たち：夕だち —— 夕つき：夕づき

故に「つ」は tsu ではなく tu である。「出づ」は idu である。「出す」(izu)ではない。「混す」は mazu である。「夕づき」は「夕すき」ではない。「す」と「つ」との發音が同じであつても其れは聲音學的音價である。文法的音價は違ふ。「夕づき」といふ時の「つ」は「つ」の濁音の心持でいふのである。「石刷」といふ時の「す」が「す」の濁音の心持で發せられるのは心持が違ふ。ワ行の「わ」「を」「う」「を」なども發音はかうあらうとも文法學的音價は wa, wi, wu, we, wo, uo である。

懸ける：懸かる —— 植ゑる：植わる

「植わる」が正しいならば、「植ゑる」は「植える」ではない。

「出づ」の活用を「で、で、す、する、すれ」とし「買ふ」の活用を「わ、い、う、う、え」とする様な假名遣は國語の音價組織を破壊するものである。實際の發音はかうあらうとも言語自身が認めた音價組織は破壊を許さない。若しも法律を改めて養子を子と認めないことに

したならば家族制度は成立するか。實子の無い家は亡びてしまふ。言語の音韻組織も之と同様である。

假名遣の改正は出来る。しかしそれは音韻の擬制組織を傷けない範圍に於てのみ許されることである。

第十四節 各活段の意義

活用の五活段には各特異の形式的意義が有る。

未然形

第一活段未然形 第一活段はその事柄が行はれるか行はれないかがどう行はれるかがまだ決められて居ない、敘述の不安定な用法である。故に未然形と名づける。此の活段の第一の用法は「打たう」「打たない」「捨てよう」「捨てまい」「捨てろ」の如く助辭「う」「よう」「ない」「まい」「ろ」を附けるに在る。何れもまだ打たない場合まだ捨てない場合を表すから未然である。

第二の用法は「打たれる」「打たせる」「捨てられる」「捨てさせる」の如く「れる」「せる」「られる」「させる」を附ける。この用法は第一の用法の利用である。「打たれる」は「犬が子供に打

たれる」の「打た」の如く敘述が不安定である。「打たれる」は犬の動作として敘述されて居るので子供の動作としての「打た」は獨立の敘述ではない。「れる」に左右される不安定な敘述である。「れる」に由つて始めてその敘述が安定する。この場合事柄の未然是即ち敘述の不安定である。「打たせる」以下皆同様である。

第二活段中程形 第二活段は第一活段と違ひ敘述は安定してゐるが、その敘述が完結しない。即ち敘述の中程である。故に私は之を中程形と名づける。

『花が咲き 鳥が鳴く』

『飯を食つて 出掛ける』

の『……』はその全體が一つの事件一つの敘述である。その中の花が咲きは事件の一部であつて敘述の中程である。故にこの活段を中程形と名づける。「斬り殺す」「打ち敗る」の「斬り」「打ち」なども同様である。「書きます」「起きた」などでも「ます」「た」は形式的意義に於て一つの動作であるから「書き」「起き」は「書きます」「起きます」といふ動作の中程である。

此の活段は「笑ひ」「喜び」などの如く名詞になる場合もあるが、それは中程形の利用であつて敘述の中程を一實質として取扱ふからそうなるのである。敘述が完結すれば動詞であつて名詞にはならないが、中程であるから名詞にすることが出来る。「笑ひ顔」「流れ水」など

所謂連用形

直截形

の如く名詞と共に熟語を成す場合もあるが、その「笑ひ」「流れ」もやはり敘述の中程の利用である。敘述が完結しては熟語にはならないが中程であるから他語へ續くのである。從來この段を連用形と名づけたが此の名稱は第二活段の眞意義が闡明されなかつた時代の名稱である。用法の末を捉へたもので本を捉へて居ない。連用とは用言に連る意である。「斬り殺す」の「斬り」などには適當であるが、「笑ひ顔」の「笑ひ」は決して連用ではない。されば此の段には從來、中止形、名詞形、熟語形など種々の名稱が有つて研究家の煩悶の跡を現してゐる。第二活段の根本義が判つた以上は中程形と名づけるのが最も適當であらうと思ふ。

第二活段の凡ゆる用法は敘述の中程の利用である。

第三活段直截形 第三活段は敘述が過不及無く完結したまゝを直截的に表示するものである。私は之を直截形と名づける。

文語では此の段を終止格に用ゐる。此の段を用ゐた終止格は「山高し」「月出づ」などと云つた様に單に判斷を表すだけで餘情を含まないから如何にもぶつきらばうに聞える。そのために口語では用ゐなくなつた。口語では唯不十分終止格(第五頁)にのみこの段の終止格を用ゐる。口語で用ゐる普通の終止格は第四活段である。

此の段は「行くべき處」「すべき事」「行くまい」などの様に「へ」「よ」「まい」などを附けるにも用ゐる。これは「べき」「まい」の形式的な意義へ「行く」「す」といふ實質的意義を附加するのである。實質的意義だけを表すには敘述に過不及のないものが適當であるから第三活段を用ゐるのである。

從來この段を終止形と名づけたが、終止格たる場合には善いが「行くべき」の「行く」を終止形と云ふ様なことは不都合である。況や口語では第三活段を終止格に使ふことは不十分終止格の外には無いのである。

指定形

第四活段指定形 第四活段は一度完結した敘述を更に一括して一つのものゝ如くに取扱ひつゝ之を指示する用法である。故に私は之を指定形と名づける。この活段の重なる用法は、一、終止格、二、動詞性名詞、三、連體格、この三つである。

口語の終止格は第四活段である。「人が来る」「學生が勉強する」「山が高い」等の如く用ゐる。彼の文語で「人來」「學生勉強す」「山高し」などいふ直截的な終止格と違ひこれは再指的な終止格である。第三活段の直截的終止格は單に思惟的な判斷を表すが第四活段の再指的終止格は一度判斷したものを捉へてまう一度之を指示する。故に再指終止格は認識が判斷的に

指示的に二度行はれる。それだから言ひ方が親切になる。この終止格の二種は文語と口語との區別になつてゐる様だが、實は文語にもこの二種が有るのである。文語では單なる記述には第三活段の直截終止格を用ゐ、婉曲に親切に言ふ場合には第四活段の再指終止格を思ゐる。婉曲にいふ場合は上に「ぞ」「なむ」「や」「か」など係の有る場合に「月ぞ出づる」「月や出づる」などの様にいふ場合が多いが、まう一つ上に係の無い場合にも

1 ふる雪の身の白衣打ち着つゝ春來にけりと驚かれぬ。後撰集一

2 我が宿の梅の立枝や見えつらむ思の外に君が來ませる。拾遺集二五

3 時鳥來居る垣根は近ながら待遠にのみ聲の聞えぬ。後撰集一

の「」の如く用ゐる。(2)(3)には上に「が」「の」が有るが(1)には無い。「が」「の」を係だと思ふ人も有るが其れは誤で係ではない。偶「が」「の」が有るだけである。要するに(1)(2)(3)は同じ用法であつて單なる判斷を表さずに判斷を再指するのである。「驚かれぬることよ」「來ませることよ」といふ様な意である。「こと」といふと名詞になるが右の例は動詞のまゝで「驚かれぬこと」の意義を内包的に表すのである。文語ではこの終止格は對話に多い。對者の無い記述では感動的な場合又は係が有つて意義が提示された場合にのみ用ゐられる。口語は

對話が本體であるから此の終止格が常に用ゐられる。そして遂には専ら此の終止格を用ゐる様になつた。

動詞が動詞性名詞になるにも第四活段指定形を用ゐる。

ものは速いが勝だ。

行くんなら行くが善いさ。

の「速い」「行く」などもそうだ。これは「速い」「行く」に關して一度そうと判斷を下したものを一實質として再指するから名詞になるのである。

連體格も第四活段を用ゐる。連體とは他語の意義の體へ連る意である。「行く人」「速い事」の「行く」「速い」の類がそうだ。この「行く」「速い」はやはりそう判斷したその判斷を一つの實質と見て之を下の名詞「人」「事」へ附加するのである。早く云へば「行く人」は「行くことの人」の意である。しかし「行く」が名詞になるのではない。動詞のまゝで「行くこと」といふ意義の内包を表すのである。

要するに第四活段の凡ゆる用法は一度敘述したものを再指するのである。之を名づけて指定形或は再指形と云へば凡ゆる場合に妥當である。

然るに從來第四活段を連體形と云つてゐる。「行く人」の「行く」は連體格であるが「行く」が

放任形

善い」「行くか」「人や行く」の「行く」は連體格ではない。連體形といふ名稱は第四活段の根本を捉へすに一末梢を捉へたものであつて全體の代表にはならない。

第五活段放任形 第五活段は敘述を放任許容の形式に表すものである。

「ば」を附けて「春が來れば暖になる」などいふ「來れ」は春が來るか來ないかを決めてゐない。即ち放任してゐる。春の來る來ないを事實に一任するのである。(三段論法では春の來る來ないをば小前提に一任するので大前提に於ては假定である。)

四段活などで第五活段は「早く行け」の如く命令の意を表すが命令は許容の下に行はれる。

「早く行け」は早く行くことを許容するから命令の意になるのである。(一二段活で第一活段へ「ろ」を附けて「起きろ」など云つて命令にするのは未然の意の利用である。)

文語で「こそ」の係として「春をこそ待て」などいふのも放任の意である。春を待つのは當然である、誰が之を無理と言はうか、已むを得ないことである、勢の然る所であるとしてその判斷を事の實際に一任するので即ち判斷の放任である。こゝいふ終止格を放任終止格といふ。放任終止格は口語では殆ど使はない。